
Fate/if

紫電

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / i f

【Nコード】

N 5 3 0 1 X

【作者名】

紫電

【あらすじ】

あなたには叶えたい願いはありますか？

例えばある人を助けたい、救いたい

また、時間を巻き戻しやり直したい

これはそんな人達がサーヴァントとしてF a t eの世界に召還されたi fの話：

彼らは何を願い、何を思いそれぞれの手に刃を持つのか：

これは私の120%妄想で書いた作品です。もしよかったら読んでください

もしもの世界（前書き）

正直うまくかけないと思います。が読んでください

もしもの世界

あなたに願いはありますか？

例えばある人を助けたい、救いたい

また、時間を巻き戻しやり直したい

これはそんな人達がサーヴァントとしてFateの世界に召還されたi fの話：

彼らは何を願い、何を思いそれぞれの手に刃を持つのか：

これは私の120%妄想で書いた作品です。もしよかったら読んでください

かつて世界魔物の脅威から救った英雄がいた。その者は人々からまつられたがその者には生涯悔やみきれぬ後悔があった。それは一人の少女の一つの願いだった。その者の名は『アスベル・ラント』

『私もみんなと一緒によかった：』

少女は彼の父親の墓の前でそう呟いた。

その瞬間彼は決意した。彼女の願いを必ず叶えようと：

しかし、彼はその願いを叶える事は出来なかった：

それが彼の後悔だった。

だからこそ彼は世界と契約した。

己の魂が輪廻から外れようとも彼女の願いを必ず叶えると：

もしもの世界（後書き）

どうだったでしょうか？楽しめたでしょうか？
また更新していくのでよろしくお願いいたします

契約（前書き）

あまり期待しないでくださいそれでも良かったら読んでください

契約

暗い宮殿の中に一人の少女が立っていた。年は18ぐらいだろうか、髪を一つに束ね右手には一本の剣を持っており彼女の回りには巨大な魔方陣が描かれていた。『これで準備万端。いつでもサーヴァントを使役できるわ…さてそれじゃ召還しますか』

少女はそう言うのと剣を鞘から抜いてそれを魔方陣の中心部に刺して呪文を唱えはじめた。

その瞬間当たり一面を光が包みこんだ。

しかし…

それと同時に大きな爆発が起きて彼女は魔方陣から弾き出された。空中で受け身を取った彼女だったが背中から思いつき後ろの壁に叩きつけられた。

『いたた…まさか失敗したのかな…』

少女は体についた埃を払って立ち上がった。魔方陣は煙をはいていたので少女はサーヴァントの召還に失敗したと思った。

しかし、煙の中から一人の青年が現れた。

『まったく、今回は強引な召還をされたな…』

青年は年は20ぐらいだろうか紅色の髪をしていて白い服で身を固めていた。

青年はそう言うのと少女に近づきひざまづいて言った。

『クラス【セイバー】主の命によりいまここにはせさんじた。汝に問う、貴方が私のマスターか？』

少女は戸惑った…なぜなら自分は確かにセイバーを使役したつもりだったがアーサー王を召還するつもりでいたのだ。

しかし、どうみても彼がアーサー王には見えなかった。

少女は恐る恐る聞いた。『私は確かにセイバーを使役したつもりだったわ。ならあなたはアーサー王なの？』

しかし、彼から返ってきた答えは違っていた。

『いえ、私はアーサー王ではありません。私の名はアスベル・ラント』

その答えを聞いた少女は落胆した。自分はアーサー王の遺品である聖剣エクスカリバーを触媒にしたつもりだったがどうやら偽物だったようだ…

『はあり、とんだ紛い物まがいものを私はつかんだようね。この剣は本物だと思っていたのにな。』

その瞬間彼から意外な言葉が返ってきた。

『いえ、それは確かに私の遺品です。その剣の名は【エクスカリバー】父の形見で私が生涯使っていたものです』

少女は少し戸惑った：確かにエクスカリバーだったがどうやらアーサー王ではなかった。しかし、聖剣が扱えるのなら少しは期待してもいいだろうか…

（セイバーのクラスで聖剣使いならたぶん強いだろう。仕方がない、聖杯戦争はこいつで勝つか…）

少女は決意すると言った。『分かったわ、なら私もあなたでこの聖杯戦争を全力で戦うわ。だからあなたも全力で頼んだわね。私の名前は【紅月 茜】あと、私に対しては敬語はなし。分かったわね』少女はそう言った。

『イエス・ユアハインネス！必ずやマスターをこの聖杯戦争の勝者にしてみせます』

アスベルは胸に拳を当ててそう言った。

『いや、だから敬語は無しって言ってるでしょ』

茜は少し怒って言った。

『あなたと私はもう協力関係だからマスターもサーヴァントもないの。だから敬語は無し』

茜は釘を刺すように言った。

『ですが…』

『いいの！それに私は敬語は堅苦しくてきらいなの』茜はそう言った。

彼は少しは悩んでから…

『分かった、これからはよろしく頼む茜』

そうして彼女達の戦いが始まった。

契約（後書き）

申し訳ありません…オリキャラを出してしまいました…

けど、楽しめたでしょうか？

また書きたいと思うのでまた読んでください

もう一人のマスター（前書き）

今回もうまく書けていないと思います。それでも良かったら読んでください

もう一人のマスター

アスベル達が契約を交わした同時刻：花畑の中に一人の少女が佇んでいた。

年は14ぐらいだろうか、紫色の髪を二つに分けて白い所の間に赤いラインの入った服を着ていた。彼女には一つの後悔があった。それは自分の想い人を悲しませてしまった事だ。そしてこの花畑も想い人との思い出の場所だった。彼女はよくここに来ていた。ここに来ればまた彼に逢えるのではないかと思ってしまうからだ。

（すまん：最後までお前の願いを叶える事ができなかった：）

自分の想い人はそう言って息を引き取ったことは今でも忘れない：（なんで気づかなかったのだろう：あの一言があの人を苦しめていたことに：）

あの人と一緒に居ることが私の一番の幸せだったのに：もう一度あの人に会いたい：）

少女は心の中でそう呟いた。

その時：

『よかろう：ならば卿^{けい}の願いを叶えてやろう』

花畑の中に声が響いた。

『誰！？』

少女は辺りを見回した。しかし、人の姿は見当たらない：しかし、また声が聞こえた。

『我と契約せよ：さすれば卿^{けい}の想い人に逢わせてやろう：』

声の主は姿を表した。年は25ぐらいだろうか、黄^{こがね}金色の髪をしていて黒色の法衣を身に纏っていた。

『貴方は誰？』

少女は戦闘体勢をとって聞いた。少女にはわかった：この男はただ者じゃない：一瞬でも気を抜いたらやられる：

『そう身構えるな：我は卿と闘おうとは思っておらぬ。ただ我は卿

と契約して聖杯戦争に勝とうと思っているだけだ：どうだ、我と契約せぬか？さすれば卿の想い人に逢わせてやろう』

男がそう提案してきた時：『いいのかよハイドリヒ：こんな弱っちい小娘をマスターにしてもよう？』

もう一人の男が現れた。年は20ぐらいだろうか、銀色の髪をしていて軍服を着ていた。

『案ずるな。この娘はそれほど弱くはない：そしてこやつはすでに我らと同じくしてこの世の法則ゲットから外れておる。』

男はそう言った。

『しかし我は理解できぬ。卿はこの世の法則から外れておるのになぜ己から望んで当てはまろうとする？』男は不思議そうに言った。

『所詮コイツらの考える事は俺等には理解出来ねえのさ：まあ俺はハイドリヒ、あんたに従うだけさ。せいぜい無様な負け方はしないでくれよ』

男はそう言うとかき消えた。

少女は考えた。確かに聖杯戦争の話しは聞いた事がある。魔術師たちがそれぞれの手に英雄を使役して最後の一人になるまで戦わせる。そして勝者は聖杯の力によりあらゆる願いを叶える事ができる。噂では聞いていたが本当に存在しているとは思わなかった：けど、もし勝者となれば願いを叶える事ができる。ならば：

『わかった、私はあなたと契約する。そのかわり必ず勝って』

少女はそう言った。

『よからう、我が名に賭けて必ず卿を勝者にしてやろう。』

そうして彼女【ソフィ・ラント】は聖杯戦争に参戦したのである。

全てはもう一度アスベルに会うために：

もう一人のマスター（後書き）

どうだったでしょうか？まだ至らぬ部分がありますので良かったら
アドバイスをください。お願いいたします

作戦会議（前書き）

めちゃくちゃ更新が遅くなりました。

今回は頑張ったのですかやはり短くなってしまいました。
それではどうぞ

作戦会議

アスベル達は今後の作戦を立てるため紅月の家に来ていた。紅月の家は昔風の瓦屋根の家だが敷地が広く道場や土蔵などがあった。そして紅月は意外にも独り暮らしをしていた。

『意外だな、茜がこんな広い敷地の家に住んでいるなんて。それに独り暮らしなんて』

『なによ意外って、私だって独り暮らしぐらいするわよ』

茜は頬を膨らませて言った。しかし、仮にも彼女はまだ18なのだ。確かに世間一般から18から大人と言うがあくまで未成年：維持費などお金の問題がある。また、生活費はどうしているのたろうか？アスベルは不思議に思った。この娘にそれほどの財産があるのだろうか？

不思議すぎたのでアスベルは聞いた。

茜は少し戸惑ったような表情をしたが答えた。

『確かに疑問思うことは当たり前だと思う。まず私の魔術を説明するわ。わたしが得意とする魔術は錬金術、卑金属を貴金属に還元したり武器を作ったりする魔術よ。まあ簡単に言えば…』

茜は懷からパチンコ玉と術式の描いてある革手袋を取り出した。

『手袋をはめてこのパチンコ玉をにこうすれば…』

そう言うと茜はパチンコ玉を握り締めた。すると…手の内が光り、手のひらを開くと中には光輝く金があった。

『まあゝざっとこんな感じかな』

茜は少し誇らしげに言った。錬金術：中世ヨーロッパで使われていた魔術。

金を生成すると科学者が息巻いていた頃に完成されたと言われている。物質を一度原子レベルまで分解しそれを配列を替えてもう一度構築し直す。それによりもとあった物質を他の物にかえることができるのである。ただし、この魔術は相当数の原子配列と膨大な魔力を使用するため術者に相当の負担をかけるため魔術者の間ではあまり好まれない魔術なのだ。しかし、使いこなせば魔術者の中でも上位にたてることも言える。『茜、お前は外見に似合わずすごい魔術を使う…』

アスベルがその先を言おうとした瞬間：茜に思いつき叩かれた。『似合わずとか一言多い』（この女容赦ないな…もしかして俺って仕えるマスターを間違えたか…？）

アスベルは叩かれた箇所を押さえながらそう思った。『そういえばアンタの魔術は何？セイバーだから剣術だと思うけど…』

茜は違和感を感じた。確かに彼は聖剣エクスカリバーの使い手だ。だから剣術使いだと自分も思う。だが、彼は何かが違っている。纏っている雰囲気、それは一種の殺気に似ていた。どの方向から奇襲されても全て打ち倒せる…どんな時でもけして警戒は解かない、そんな殺気だ。それに彼の宝具【エクスカリバー】あれ自体も何か違う空気を纏っている。

とにかく彼はただのセイバーではないこと茜は直感で悟った。せめて、彼の宝具の力さえ分かればこの疑問は解けると思うけど…

『俺は確かに剣術を使う。俺の剣術は己の剣に魔力を纏わせ攻撃するといった技だ。』

他に質問はあるか？』アスベルは茜の質問にきちんと答えた。ただ一点を除いては…

『なら、アンタの宝具の名前を教えて。その剣がエクスカリバーだとはわかったけど私の知っているものではないしそれにアンタ、も

う一個宝具を隠しているでしょ？」

茜はズバリと言った。自分の違和感が当たれば彼にはもう1つの秘密があるはず：そして、それが彼の強さの証明になる。しかし返ってきた答えは違っていた。

『すまない、今はそれだけは答える訳にはいかない。どうしても答えて欲しいのならその令呪を使うんだな』

アスベルはちよつと苦笑いして言った。

『なんでよ？アンタの力が分かればまだ作戦がたてやすいでしょ。だから教えなさい！！』

茜は少し怒ったふうに言った。大概の男は茜がこのような態度をとるとしぶしぶ話すが：アスベルは違っていた。

『なら茜。お前は己の大罪を無闇に他人に口に出来るのか？』

『えっ：』

茜は返ってきた答えが自分の予想していないものだったため言葉を失った。

己の大罪：？アスベルが咎人：

『俺は自分の自己満足のために一人の少女の運命をねじ曲げてしまった。そして、その少女の願いすら俺は叶えられなかった。それが俺の強さの理由だ。だから今は話す事は出来ない。すまない』

アスベルはそう言うと言を下げた。罪が強さとなる：アスベルがかつて大罪を犯しそれを償うため英霊となった。なぜアスベルが大罪を犯したかは確かに気になるがいづれ彼の口から語られる事を今は待つしかないか：（確かに私もアスベルには言えない秘密があるわけだからねえ：しょうがないから今は聞かないでおくか）

『分かったわ。私も無神経な事をしたわね：ごめんなさい。けどいづれはアンタの口から語って欲しいわね』

茜もペコリと頭を下げた。茜は新たに決意した。この聖杯戦争をアスベルのためにも必ず勝つと：

しかし：二人の戦いは：二人の予想だもしない瞬間始まった。

『茜、伏せろ！！』

アスベルはそう言った瞬間茜に覆い被さった。

『えっ…』

茜はその言葉を理解しようとした瞬間：

一筋の光が茜を掠めた。そしてであろうことかその光が壁に当たった瞬間に跡形もなく吹き飛んだ。

『ああゝあ、こっちは一瞬でかたをつけようと思ったのになあゝ。なかなか感度のあるサーヴァントを召還したようだね、紅月 茜』
そこに立っていたのは一人の少年だった。

『お前は誰だ!!』

アスベルは剣を構えて言った。一瞬でも気を抜くと殺られる。少年はそれくらいの技量を持っていた。

『今から死ぬやつに名乗る義務はないと思うけどなあゝ。まあいいや、初めまして。僕の名前は【キャスター】とだけ言っておこうか』
少年はそう言うのと両手を構えて戦闘体勢を取った。

二人のサーヴァントの戦いが今静かに始まった。

作戦会議（後書き）

どうでしたでしょうか？

またアドバイスをいただければ幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5301x/>

Fate/if

2011年11月13日13時20分発行